

# 徳富蘇峰記念館

## 昭日録(8)

### 昭和書簡展

平成二年一月五日〜十二月二十日まで

蘇峰は文久三年に生まれ、昭和三十二年に逝去しましたので、明治以前五年、そして明治、大正、昭和の前半を生きたこととなります。ですから正確に言うと、今回の書簡展は、昭和前半の書簡展ということになります。今回は主に政治家とジャーナリストの書簡を展示しました。政治家では昭和の最初の総理大臣田中義一、戦後の鳩山一郎等、ジャーナリストでは中央公論社の嶋中雄作、改造社の山本実彦、文芸春秋社の菊池寛、読売新聞社の正力松太郎、馬場恒吾、朝日新聞社の緒方竹虎、中野正剛、毎日新聞社の高田元三郎、丸山幹治などです。

当時の蘇峰の意見、心境が窺える蘇峰の書簡手控も展示しました。東条首相に宛てた、戦時下の新聞紙削減に警告を發した「意見書」(十七、十八年)、吉田茂首相の議會を無視した独裁を戒め、鳩山一郎に政權を譲るように勧めている「日本国民ノ一人トシテ、吉田首相ニ一言ヲ呈ス」(二十七年八月)。これには、明治二十三年、日本の最初の議會開設から政治に係わってきた蘇峰の、議會を尊重する姿勢があらわれています。

第二次近衛内閣の外務大臣であった松岡洋右は、開戦三日後に、国交処理つまり終戦工作をいつかはしなければと蘇峰にうちあげ、エンピツ書きの便箋六枚の走り書きの手紙(十六年十二月十一日)を届けています。小泉信三は、大日本言論報国会の会長の蘇峰に向って、福沢諭吉の独立自尊の精神が、国家主義から圧力を受けていると、敢然と駁論(十九年五月三十日)しています。中野正剛は東条の独裁、翼賛政治体制協議会を批判し、蘇峰に会からの辞任を忠告(十七年・春)しています。中野正剛と緒方竹虎の友情、東条と中野の間にあつて尽力した蘇峰と緒方の働き等は書簡に示されています。

また昭和十年代のジャーナリストの声が聞こえて来るようです。それは当時の言論人が蘇峰に正直な意見を書き送っているからです。蘇峰は昭和十七年十二月に「大日本言論報国会」の会長に就任しました。その関係の書類を展示し、また昭和二十年十二月から二十一年にかけて書いた蘇峰の「法廷に立つ気持ち」(タイプ用紙三十枚、秋本俊吉英訳)も展示しました。蘇峰が昭和四年、国民新聞社を引退したとき、菊池寛は「ただ敢然として処決せられたるは、先生の尚老いざるを示し、むしろ会心の事」と書き送りました。傷心の蘇峰にとつて、この菊池寛の手紙(四年一月十七日)は、五十万円の株券よりもありがたかったそうです。嶋中雄作は昭和五年、中央公論社が初めて単行本『西部戦線異常なし』を出版したとき、蘇峰に推薦文を依頼し、蘇峰から「世界平和を祈る者にこの一冊を」という文をもらい、「万の賛辞よりも増してわれら光榮に存する処」(五年三月一日)と喜んでいました。昭和十九年七月情報局は中央公論社、改造社の自発的廃業を指示しました。それより一カ月前に、「改造」の創刊者山本実彦は「事件ノ信相ハ、皆目私モ不明ナノデス」と蘇峰に報告し、「御高誼ヲ永ラク受ケテ此ノ始末デアリマス」と悲しみを告げています。賀川豊彦は「日本で唯一の先生」と、蘇峰を人間のお父さんと呼んでいます。たしか鳩山一郎も蘇峰の「父の如き御親切」に感激しています。俳句の杉田久女も「御父君様のよう」に感じると書いています。清朝最後の皇帝で満州国の皇帝薄儀の書簡(六年九月四日)や、蘇峰を批判した阿部真之助、清沢冽の書簡等九十余点を展示しました。また今回は特に西郷隆盛のコナーを設け、西郷の外套(毛皮裏付)一着と、海舟自筆の漢詩「老騏」、西郷と海舟を両英雄と詠んだ蘇峰の漢詩「千秋相對す両英雄」を展示しました。外套には明治十年西南戦争のとき、西郷南州翁より、辺見十郎がたまわったという証書が付いています。蘇峰は『近世日本国民史』巻百で次のように書いています。「西郷・勝両雄が江戸城授受に関する談判の如きは、実に維新史上に於ける二つ無き美談であり、且つ快談である。人をめつたに褒めなかつたと云われる海舟が、西郷の大智大勇に敬服していたと、海舟にかわいがられていた蘇峰が書いているのですから、真実味があります。以上が簡単な展示内容の紹介です。個々の資料の説明のかわりに、今回は三点の書簡を全文活字にしました。

一、緒方竹虎書簡（昭和十九年七月五日）

拜啓 先週土曜日、正力氏と会見 月曜日田中新聞会長と会見 昨火曜

新聞会に田中 正力 高石 大野諸氏の参集を請ひ 御高論を披露して

蹴起を促し候処 皆々趣旨に於ては、大賛成 先づ手始めに東条内閣の

注文引受所たる阿部大将と会見 言論人としての忌憚なき意見を披瀝する

ことに決し 明六日大将を訪問する段取と迄相成候。先生の謂ゆる「虎髯

を將づる」感無きに非ずも 手始めとしては此辺かとも考へ候。其際高石

氏より先生玉稿に關し 当局と折衝の経過を聴取 高石氏に乞ふてゲラ刷

をも拝見仕候処 実に近来の大文章にて 今日吾々言論人の意衷を尽して

一字の加ふるもの無御坐候。何故にこれを紙上に掲載せしめざりしか 端

的にこれが時局を今日に致したる所以 生死岩頭に立ちながら 人心の燃

え立たざる所以 言論の黙止を許さざる所以と存候 阿部大将と会谈の結

果如何によりては、老先生の御出慮を請はざるを得ざる事あるやも知れず

予め御含置奉願候 軍官民共に尊陛下の赤子たるに於て 寸分の差違なし

然るを日支事変も、大東亜戦争も、銃後の事も、軍官のみにて、民を無視

し、而も軍々官々ばらばらに小是非 小分別に日を暮したる結果が今日の

為体にて、痛憤此事に御坐候 阿部大将と会見後 間を見て拝訪 親しく

御高教を仰ぎ度 為邦家一層御加餐万祈候 草々頓首 七月五日 徳富老

先生玉案下 緒方竹虎

二、鳩山一郎書簡（昭和二十年十月十七日）

拜復 十月十四日付の御尊墨只今拝誦仕候 東京は言論自由をはき違ひ

共産党の無軌道の演説は遺憾至極に御座候 吾々が天皇制維持に命を抛げ

出すこと 勿論に御座候 御安意被成下度奉願候 松野君一昨夜九州に出

発致候 帰京後に回覧に可供 又安藤君には明日可示候 止むに止まれず

新党結成に努力中の小生共々 御声援の程切に奉希候 十月十七日 蘇峰

先生 鳩山一郎

三、徳富蘇峰手控草稿「日本国民ノ一人トシテ、吉田首相ニ一言ヲ呈ス」

（昭和二十七年八月三十日）

休戦後ノ首相トシテハ幣原 片山 芦田ノ三氏ニ比シテ一頭ヲ抽ンデテイ

ル

君ノ取柄ハ硬骨ナルコト 正直ニシテ黒白明白ナルコト 個人的物慾ノ淡

泊ナルコト等ハ其ノ長処デアロウ

外交上ニハ兎モ角モ政治上ニ於テハ全然素人デアル 時ト共ニ進歩セズシ

テ退歩シテイ

君ハ全クテモクラシーヲ解得セズノ人ナリ 独裁者ノ能力ナクシテ 独裁

者タランコトヲ期スモノナリ

人間尊重デアアル 然ニ君ハ人間尊重ヲ解セザルモノニ似タリ

君ハ此ブモノト共ニ此ブコトヲ知ルモ 悲シムモノト共ニ悲シムコトヲ知

ラズ

大磯邸前ニ

日比谷公会堂ニ他国抑留者遺族ノ会合ニ顔ヲ出サザルガ如キハ 其ノ尤モ

昭著ナルモノデア

君ハ他ノ閣僚若シクハ公党ノ幹部ヲ見ル 殆ド給仕 小僧同様ノ如シ

議會ガ政治ノ中心ナリ 然ルニ殆ンド議會ニハ顔ヲ示サズ 恒ニ函根ノ一

角ニ雲陰トヲナス

ハーネル、ヒットラーノ如キ亦タ然リ 然モ是レ悪例ナリ

桂首相ノ如キ世上ニハ官僚的政治家ノ標本トナス 然モ彼ハ議會ニ出席シ

タルバカリデナク 総テノ閣僚ニ代リテ攻撃ノ矢面ニ立テリ

閣僚ガ桂ヲ救フ以上ニ桂ハ閣僚ヲ救フタリ

然ルニ君ハ党務モ國務モ他ニ一任シ 独リ山中ニアリテ愉想シテイ

君ガ吉田内閣ノ参謀ナラバ尚可ナリ 吉田内閣ハ吉田ニヨリテノ内閣デハナ

イカ

特ニ今回ノ解散ノ方法ニ到リテハ 言語同断沙汰ノ限りデア

カ自党マデモ出シ抜キ 解散シタルガ如キ卑法千百 横暴至極ト云ハザル

ヲ得ズ

君ハ小事ニ於テハ兎モ角モ大事ニ於テハ間違ナシトノ信用アリキ 然モ再

軍備問題ノ如キハ曖昧糊塗此ノ一点ニ於テハ 寧ロ芦田氏ノ正々堂々其ノ新

見ヲ開陳シタルニ対シ 漸惶ニ至リト云フ可キデア

日本国民ノミナラズ 自由党サヘモ君ニ殆ンド失望セリ 此度寧ロ大反省

ヲ加ヘ 選氣以前ニ鳩山氏ニ総裁ヲ讓ルニ若カズ 鳩山氏健康問題ハ鳩山

氏自身ノ問題デア

鳩山氏ハ自カラ其任ニ堪ルコトヲ明言ス 軍人ハ戦

場ニ斃ト 政治家ハ政治ニ斃ル 鳩山氏ニシテ自カラ死ヲ決シテ起ツト云

ハバ何ノ顧慮ヲ要センヤ

昭和二十七年 八月三十日 蘇叟九十

昭和十九年、緒方が「日支事変も、大東亜戦争も、銃後の事も、軍官のみにて、民を無視し、しかも軍々官々ばらばらに小是非、小分別に日を暮したる結果」が今日の状態を招いたと蘇峰に書いているところに、戦時下でも、言論人の仲間のあいだで、言論の自由が守られていたことを感じます。鳩山は戦後すぐに、天皇制維持を蘇峰から、託されていたことがわかります。蘇峰が吉田茂に、鳩山に政権を譲るように書いた書簡は、吉田が八月二十八日、衆議院を抜打ち解散した二日後のもので、しかし鳩山内閣が実現するのは、吉田への「一言」から、二年四ヵ月後の昭和二十九年十二月です。蘇峰が鳩山を支持していたのは戦後からではないことは、昭和九年鳩山文部大臣が、綱紀問題で辞任まで追いこまれた時、蘇峰が鳩山をなぐさめる手紙を出していたことでも窮えます。鳩山は「御同情を辱うし 誠に感服致居候 迫害の中々猛烈にして閉口致し居候 審査会の決定が済まぬ以前に進退を決する訳にもいかず 辛抱」していると書いています。吉田の実父竹内綱は土佐の旧自由党板垣退助の領袖で、板垣や植木枝盛と交流のあった蘇峰は、竹内綱とも交友があったかもしれませぬ。鳩山一郎の父和夫と蘇峰は交流があったので、親子二代の交友ということになります。吉田からの蘇峰への書簡はありません。

人間はどんな偉い人でも、世の中に影響力のある期間には限りがあると、思います。蘇峰は九十五歳まで生きたとはいえ、その長さに改めて驚かされます。昭和二十七年蘇峰は「九十翁独話」で次のように言っています。

「老生一生ノ裁判ハ百敗院トシテ自ラ判決セリ 此一点ニ付テハ保存スル必要モナシ取消ス必要モナシ 但タ他ノ観察点ヨリスレバ、自カラ幸運ヲ祝福セザルヲ得ズ 第一ハ長寿ナリ 第二ハソノ時期ガ明治ヲ中間ニ挟ミタルコトナリ 吾生ハ三十年ト云フ限度ヲ付セラレタリ 然ルニソノ三倍ノ年齢ヲ取得タリ 長寿既ニ幸運ナリ 況ンヤ其ノ時代ガ日本ニ於テモ世界ニ於テモ面白キ時代タルニ於テモ」

蘇峰は第二次世界大戦が終わった時、自分の戒名を「百敗院泡沫頑蘇居士」とつけました。これが蘇峰一生の自からの判決だったのでしようが、晩年の蘇峰の明るさは、どこからきていたのでしょうか。日本にとっても、世界

にとっても面白い時代に生きたことを、感謝している九十歳の蘇峰に、その晩年の明るさと、蘇峰関係の資料の面白さの秘密があるように思います。

(学芸員 高野静子)

平成二年一月

財団法人 徳富蘇峰記念塩崎財団

●展示資料

○徳富猪一郎殿 顧問ヲ委嘱ス 昭和十五年五月一日 国民精神総動員本部会長 米内光政印

○徳富猪一郎殿 詔書奉戴併二軍国即応の体制整備に関し 来十二月十二日午后二時同盟本部に於て 全役員会を相開き候條 萬障一排除出席被成下度 右御通知申上候 敬具 昭和十六年十二月九日 大日本興亜同盟総務委員長 林銑十郎印

○『翼賛政治会會員名簿』翼賛政治会 昭和十七年八月(百三十五頁)

○徳富猪一郎 翼賛運動宣傳本部顧問ヲ委嘱ス 昭和十八年五月三十一日 大政翼賛会総裁 東条英機印

○『大日本言論報国会要覧』社団法人大日本言論報国会 昭和十八年七月「定款」役員名簿「関係方面電話便覧」(六十頁)

○言論報国会一周年理事会の写真一葉 昭和十八年十二月末

○雑誌『言論報国』大日本言論報国会 昭和十九年一月・二月・三月号

○社団法人大日本言論報国会総会次第 日時 昭和十九年六月十日 会場 大東亜会館

○極東国際軍事裁判所法廷席図解

○「法廷に立つ気持」(蘇峰著・タイプ用紙三十枚 秋本俊吉英訳 昭和二十年十二月より二十一年にかけて)

○自宅拘禁解除通知 昭和二十二年九月一日

○言論報国会会長であった飯の指定書 昭和二十二年九月十日

○徳富猪一郎殿 公職に関する就職禁止、退職等に関する勅令の規定による覚書該当者の指定の解除に関する法律の施行に伴ふ解除申請書の提出について 熱総第二八二号 昭和二十六年十二月二十一日 熱海市長 宗秋月印

○終戦直前直後に投下された宣伝ビラ 十八枚

○戦時中に出された雑誌やパンフレット

「どんな隣組がよいか」翼賛隣組ニュース社編 昭和十六年十月五日 二十九頁

○「此一戦 国民は如何に戦ふべきか」中野正剛著 東方会発行 昭和十七年二月十五日 六十四頁

○「良い子の友」小学館 昭和十七年十二月一日 一〇八頁

# 「昭和書簡展」一覧表

注 (書簡数のうち( )内は空封筒  
〔 〕内は筆写されたものを示す。  
人物の解説はコンサイス人名辞典(三省堂)等による。)

氏名	生没年	出身	号又は本名	書簡通数	解説
阿部 信行	明治8～昭和28	石川		5	36代総理大臣。陸軍軍人。翼賛政治会の総裁。朝鮮総督。敗戦後、戦犯に指定されたが、不起訴となった。
市村瓊次郎	元治1～昭和22	茨城	器堂	4+(1)	東洋史学者。東洋学会、新声社を創立。「支那史」を刊行。考証学にすぐれていた。東大教授。
内田 良平	明治7～昭和12	福岡		4	大アジア主義と天皇主義を標榜して〈黒龍会〉を結成し、主幹となる。米騒動を鎮圧するため、「大阪朝日新聞」膺懲運動を起こし、吉野作造と公開論争をして敗北。その後、加藤高明首相暗殺未遂事件で入獄。右翼運動の指導者。
岡田 啓介	明治1～昭和27	福井		1	31代総理大臣。海軍軍人。斎藤実内閣の海相となり、海軍軍備の拡張に努力。2.26事件で襲撃されたが、あやうく助かり、内閣総辞職。天皇制存続のための和平工作を画策した。
川合 玉堂	明治6～昭和32	愛知	芳三郎	8+(1)	日本画家。橋本雅邦に入門。「二日月」で画名を高めた。「彩雨」を描き、文化勲章を受章。青梅市に玉堂美術館が建てられている。
川田 順	明治15～昭和41	東京		76	歌人。引退するまで実業界にあったが、その間、歌人として、また「新古今集」などの研究者として多くの業績を残した。戦時中、戦争讃歌を多く作り「幕末愛国歌」など3部作で朝日文化賞が与えられた。敗戦後は皇太子の作歌指導や歌会始選者になったが、〈恋愛事件〉でこれらの職を辞した。
清沢 冽	明治23～昭和20	長野		1	ジャーナリスト。「朝日新聞」企画部長となったが、「甘粕と大杉の対話」が右翼を刺激し攻撃のキャンペーンを受け「朝日新聞」を辞めた。「中央公論」特派員、「報知新聞」の論説委員となる。「暗黒日記」で蘇峰を批判。
小磯 国昭	明治13～昭和25	山形		5	41代総理大臣。陸軍軍人。満州事変前後の軍部の政治進出を推進。関東軍参謀長、朝鮮軍司令官、朝鮮総督を歴任。戦争指導体制の一元化によって戦局挽回を図ったが対中国和平工作の失敗を契機に内閣総辞職。極東裁判でA級戦犯となり終身刑に服役中病死した。
斎藤 実	安政5～昭和11	岩手県		7	30代総理大臣。海軍軍人。日露戦後の海軍軍備の拡充を推進。三・一独立運動の朝鮮に総督として赴任、治安体制の整備拡充につとめた。(5・15事件)後〈挙国一致内閣〉を組織したが、帝人事件にまきこまれ、総辞職した。2.26事件で〈君側の奸〉として襲撃され殺される。
杉田 久女	明治23～昭和21	鹿児島		4	俳人。小説家を志したが果せず高浜虚子に師事。昭和7年俳誌「花衣」を主宰。激しい言動のため世の誤解を招くことが多かった。死後娘の石昌子によって「杉田久女句集」が出され、その優れた才能が認められた。

氏名	生没年	出身	号又は本名	書簡通数	解説
鈴木貫太郎	慶応3～昭和23	千葉県		(1)	42代総理大臣。海軍軍人。忠実な天皇側近としての姿勢を示したため、かえって〈君側の奸〉とされ、2.26事件で襲撃されて重傷を負い侍従長を辞職した。 '45組閣、〈一億玉砕〉を呼号する一方、最後の望みをソ連仲介和平に托して秘かに画策。原爆投下、ソ連参戦の急迫した事態の中で〈国体護持〉のためのポツダム宣言受諾の途を切りひらくこととなった。
高田元三郎	明治27～昭和54	千葉		15	大阪毎日に入社。ニューヨーク、ロンドン特派員を経て、東日外報部長、主幹、総集総長、代表取締役となったが戦後辞職。昭和19年毎日新聞の新名政治部記者の「竹槍では間に合はぬ」という記事に東条が激怒した竹槍事件で、責任をとった。
田中義一	元治1～昭和4	山口県		7	26代総理大臣。陸軍軍人。昭和2年首相となり、外相と拓相を兼任、普通選挙による最初の総選挙を実施、緊急勅令で治安維持法を改悪した。3次にわたる山東出兵を強行するなど侵略政策を推進した。
辻善之助	明治10～昭和30	兵庫		15	歴史学者。史料編纂掛が史料編纂所と改称され初代所長となる。東大名誉教授。文化財専門審議会会長。52文化勲章受章。「日本仏教史」全10巻、「日本文化史」全7巻を著わした。
東郷平八郎	弘化4～昭和9	鹿児島		軸	海軍軍人。日露戦争時には、旅順港封鎖作戦を行ない、ロシア海軍極東艦隊を黄海海戦で、また、バルチック艦隊を日本海海戦で全滅させた。戦後、元帥にすすみ、日露戦争の戦功で国民的英雄として尊敬され、海軍部内でも大きな発言権をもった。昭和4年ロンドン軍縮条約の承認にあたり、条約に強硬に反対、軍の元老的存在であった。国葬。蘇峰へ為書の軸を展示。
内藤湖南	慶応2～昭和9	秋田	虎次郎	7	東洋学者。「日本人」の編集に携わり三宅雪嶺の影響を受ける。「台湾日報」主筆、「万朝報」・「朝日新聞」記者。訪中6回、民国の政治家と交わる。京大教授となり東洋史の〈京都学派〉を育てた。敦煌文書などの調査を行なった。「満州国」建国には深い危愆の念を抱いた。
中村汀女	明治33～昭和63	熊本	波魔子	2	俳人。高浜虚子に師事。「ホトトギス」同人となり、家庭の日常を感情豊かに詠む女流俳人として知られる。「風花」を創刊し主宰する。蘇峰の俳句を晩年まで添削する。
服部宇之吉	慶応3～昭和4	福島	随軒	3	東洋哲学者。東大文学部長、ハーバード大教授、京城帝大総長、国学院大学長、東方文化学院長のほか、斯文会・日華学会を主宰。中国の礼の思想の体系化につとめた。
馬場恒吾	明治8～昭和31	岡山		39	“Japan Times”編集長。国民新聞社理事。社会大衆党の顧問として普選・無産運動に参加し、リベラルな論陣をはった。戦後、読売新聞社社長に就任、読売争議の弾圧にあたった。日本新聞協会会長。
浜口雄幸	明治3～昭和6	高知		1	27代総理大臣。威厳ある特異な風貌と篤実な人柄とから〈ライオン首相〉と呼ばれた。ロンドン軍縮条約に調印、国際協調主義を貫いたところから、軍部・右翼とこれに呼応する枢密院・政友会から〈統帥権干犯〉の非難が高まり、東京駅で右翼青年に狙撃されて重傷を負った。

氏名	生没年	出身	号又は本名	書簡通数	解説
林 銑十郎	明治9～昭和18	石川		10	33代総理大臣。陸軍軍人。政党を除外した林内閣は、施政方針に〈祭政一致〉というスローガンをかけた。一挙に親軍政党を作ろうとしたが、露骨なファッション化にたいする国民の不満がたかまり4か月の短命内閣として総辞職した。その後、大日本興亜同盟総裁をつとめた。
原 三溪	明治元年～昭和14	岐阜	富太郎	5	横浜の生糸貿易が生んだ豪商。古美術を蒐集し、古建築を移して、理想美術館「三溪園」の実現、公開を旨とした。天心なき後の鞆彦、古徑ら近代日本画家を育成した。蘇峰と親交が厚かった。
平沼騏一郎	慶応3～昭和27	岡山	機外	1	35代総理大臣。大逆事件では主任検事をつとめて社会主義抑圧のための〈暗黒裁判〉を指揮。司法界きっての実力を築く。 敗戦後A級戦犯として終身刑を宣告され、病気のため仮出所後死去した。
広田弘毅	明治11～昭和23	福岡		1	32代総理大臣。少年時代から玄洋社に接し国権論の薫陶を受ける。国連脱退後の情勢に即応しつつ中国権益の拡充につとめた。2.26事件後、組閣。敗戦後A級戦犯として、文官中、唯一人絞首刑を宣告され、刑死した。
深尾須磨子	明治21～昭和49	兵庫		17	詩人。「真紅の溜息」「永遠の郷愁」などを刊行。一方、日本婦人団体連合会評議員となり、第4回世界婦人大会（ウィーン）に出席。平塚らいてうとともに〈新日本婦人の会〉結成に大きな役割を果たした。
溥 儀	明治39～昭和42		姓は、愛新覚羅	1	清、最後の皇帝、満州国の皇帝。3才で即位、辛亥革命で退位。'34満州国皇帝となるが、日本降伏の直後、満州解体と退位を宣言。極東国軍事裁判で検事側証人として喚問され、満州国皇帝としての自己の地位の傀儡性を証言した。
福田徳三	明治7～昭和5	東京		5	経済学者。吉野作造らと〈黎明会〉を組織、急進的雑誌「解放」の編集に従事。経済理論、経済史・社会政策・労働問題など各般に及ぶ研究は高い評価を得たが、資本主義社会を維持しつつ国家による漸次的改良を主張する社会政策学派の見地にたち、労働運動・社会主義運動高揚のなかでは、それらとの対立を深めた。
丸山幹治	明治13～昭和30	長野	侃堂	8	ジャーナリスト・政治評論家。「日本新聞」「京成日報」をへて「大阪朝日新聞」に入ったが、米騒動のさいの筆禍事件のため、大山郁夫・長谷川如是閑らとともに退社した。大阪毎日新聞社に入り、短評欄「余録」に執筆しつづけた。
三木露風	明治22～昭和39	兵庫	操	2	詩人。〈早稻田詩社〉結成に加わり口語詩を試みた。抒情詩人、象徴詩人として優れた才能を示した。雑誌「未来」を創刊。宗教詩集を出版。「赤とんぼ」などを収めた童謡集もある。
南 次郎	明治7～昭和30	大分		16	陸軍軍人。2.26事件後、関東軍司令官を辞し、予備役となったが、'36～'42朝鮮総督となる。その後、枢密顧問官、大日本政治会総裁、勅選貴院議員などを歴任。敗戦後、A級戦犯として終身禁錮刑に処せられたが、病気のため仮出獄した。 昭和10年、溥儀と蘇峰の会見の下準備をした人物。

氏名	生没年	出身	号又は本名	書簡通数	解説
宮田 武義	明治24～現在100歳	広島	遊記山人	130	上海東亜同文書院卒。大正11年東京日々谷に中華料理店「山水楼」を創業、今日に到る。書と篆刻を好み、蘇峰用の多くの印を篆刻する。書は川端康成、湖蘭成が称讃。白寿記念展覧会を開く（平成元年）。現在 百歳翁。
安井曾太郎	明治21～昭和30	京都		1	洋画家。一水会を創立。東京美術学校（東京芸大）教授。日本美術家連名初代会長。文化勲章受章。第1回現代日本美術展に「オランダ皿の桃」を出品、優秀賞を受賞した。
米内 光政	明治13～昭和23	岩手		2	37代総理大臣。海軍軍人。親英米的性格のため、日独伊三国同盟締結を望む陸軍側としばしば対立した。海軍軍人のなかでとくに国際的視野が広く、戦争の見通しについて確固とした信念をもち、陸軍強硬派への抵抗に終始し、降伏のやむなきを主張しつづけた。
米山 梅吉	明治1～昭和21	東京		15	8年間にわたり在米。帰国後、日本鉄道から三井銀行に入った実業家。大正9年、東京ロータリー・クラブを創立し、自ら会長に就任。信託協会会長、三井合名理事、三井報恩会理事長。

この他、次の人々の書簡を展示してあります。

説明は「目録7」掲載の「百家書簡展」一覧表をご参照下さい。

会 津 八 一	北 里 柴三郎	高 群 逸 枝	松 岡 洋 右
安 部 磯 雄	九 条 武 子	橘 端 超	安 田 鞆 彦
阿 部 真之助	国木田 信 子	坪 内 道 遙	柳 田 国 男
石 川 武 美	小 泉 信 三	東 条 英 機	山 室 軍 平
犬 養 毅	近 衛 文 磨	頭 山 満	山 本 五十六
浮 田 和 民	幸 田 露 伴	徳 富 静 子	山 本 実 彦
内 村 鑑 三	西園寺 公 望	徳 富 蘆 花	与謝野 晶 子
大 谷 光 瑞	斎 藤 茂 吉	徳 富 愛 子	与謝野 鉄 寛
大 原 孫三郎	佐々木 信 綱	永 井 龍太郎	吉 川 英 治
岡 本 かの子	島 崎 藤 村	中 野 正 剛	吉 野 作 造
緒 方 竹 虎	嶋 中 雄 作	中 村 不 折	吉 屋 信 子
賀 川 豊 彦	下 田 歌 子	長 沢 規 矩也	
堅 山 南 風	正 力 松太郎	新 渡 戸 稻 造	
勝 海 舟	相 馬 黒 光	野 間 清 治	
川 端 龍 子	高 田 早 苗	鳩 山 一 郎	
菊 池 寛	高 浜 虚 子	益 田 孝	

(高野静子・影山 薫 作製)